

序 文

私は技術者として海軍に勤務中その全期間を通じ、徳山海軍燃料廠に関与し、特に終戦時には廠長として其の最後を見届けたので、徳山は第二の故郷と考えている。此度海軍と全く関係の無かった徳山大学総合経済研究所の脇英夫氏を中心にして『徳山海軍燃料廠史』を編纂された事に対しいたく感激し、満腔の敬意を表する次第である。

徳山海軍燃料廠は「燃料のメッカ」として終始我が国の燃料界を指導する地位にあったが、其の活動には大別して三つの段階があった。その第一は煉炭時代、第二は重油時代、第三は航空燃料時代であった。

煉炭の問題は武田秀雄海軍中将がその生涯をかけての研究努力の結果、明治三十八年に徳山の海軍煉炭製造所の設立を以て完結した。重油時代に対応し、大正十年には海軍燃料廠へ改組され、煉炭部・製油部及び研究部の三作業部が置かれ、重油に対しては差し当り備蓄の方針が採られ、主として製油部がこれに当り、研究部は恒久対策として低温乾溜の研究に主力を注ぎ、後石炭液化の研究に移行した。

私が海軍燃料廠製油部々員として徳山に赴任したのは昭和二年六月であったが、時既に航空燃料の生産が開始されて居り、爾來終戦に至る迄、私の任務は航空燃料との戦いであった。昭和十年十一月海軍省軍需局々員に補せられ、軍用燃料の調達を担当し、国防の重責を担うことになったが、その最大の難関は航空燃料に在った。北

米合衆国は豊富な石油資源と膨大な石油産業に恵まれ、航空燃料の取得は既存の民間企業に依存することが出来たが、我が国では限られた資源を活用し独自の製造方法を研究し工業化するの外無かった。これが完遂のため最大の急務は研究機関の拡充であった。大船に海軍燃料廠実験部を置き、逐次研究部を同所に移転し燃料等の研究実験を主務とする燃料廠として独立発展を図り、また多数の燃料技術者を確保するため主として化学系の学生を技術士官として採用の方途を講じた。徳山の研究部及び大船の海軍燃料廠の研究成果は総て徳山の燃料廠で工業装置として設計、建設運転の上、技術の完成を図った。かくて所要技術の開発並に取得の見通しを得て、四日市に海軍所要の燃料及び潤滑油等を生産する大燃料廠が計画され、海軍の具体的燃料対策はその緒だったのであった。以上に示す通り、徳山は真に海軍の燃料技術の発祥地であった。

この徳山の燃料廠にあって、海軍燃料界に偉大な貢献をされた人物として既に述べた武田秀雄海軍中将の外、次の諸官の名前を挙げたい。

河瀬眞海軍少将は研究部の基礎を築き、多数の研究者を育成された。

京都帝国大学の小松茂博士は燃料廠開設の当初より終戦に至る迄、燃料廠顧問として研究の指導に当られ、博士の指導に依り、学位を得た人は十五人の多きに及んだ。

別府良三海軍中将は徳山海軍燃料廠で各種重要技術の開発を指導し、四日市第二海軍燃料廠及び台湾高雄第六海軍燃料廠の建設に当られた。

嘉納吉彦海軍大佐は徳山の勤務を経て航空技術廠発動機部にて航空燃料及び潤滑油の実用実験を行い、その研究並びに生産に寄与する所が尽大であった。

以上要するに徳山の海軍燃料廠は日本海軍燃料の総てのルーツであるばかりでなく、燃料技術の上で我が燃料

界全般に奇与したところ尠くない。

今回かつての燃料廠所在地の大学である徳山大学総合経済研究所において、地元所在の史料や、地元に住する旧職員の証言等も資料に加えて、海軍燃料廠三代に亘る歴史を調査研究され、刊行されることは、極めて意義深く、付炊に堪えないところである。

昭和六十三年五月

渡邊 伊三郎